

キャリア・ポートフォリオ・プログラムにおける身体的資本への評価

Ross Collin (2011) "Dress Rehearsal: A Bourdieusian Analysis of Body Work in Career Portfolio Programs." *British Journal of Sociology of Education*, 32 (5), 785-804.

東京大学大学院 喜始 照宣

誰が“有望な人材”として、教育市場や労働市場において評価されるのか。また、今という時代において、何が“有望な人材”の指標となっているのか。グローバル人材の育成が叫ばれ、他方で国内での労働市場の不安定化や学校から仕事への移行における困難さの高まりから学校教育におけるキャリア教育が推進されている昨今、“有望な人材”像は大きく変貌しているのではないか。諸個人が有する経験やスキルの多寡に加え、いかにして個性を示すかという、被評価者の自己呈示の巧拙が、“有望な人材”を見定める際の指標として重要性を増しているように思われるのである。また、こうした社会的変化に応じて、例えば以下で紹介するキャリア・ポートフォリオ（以下、CPと略称）への関心が高まっている。こうしたCP普及が進行する背景には、教育・労働市場における厳しい現状をなんとか乗り切りたいという、教育関係者や若者たちの切実さが垣間見られる。

では、CPは、学校教育や労働市場における当事者たちに、いかなる影響をもたらしているのか。今回紹介するCollin (2011)は、近年、先進資本主義社会において広がりを見せている、CPを利用した教育プログラムについての研究である。米国における高等学校2校のCPプログラムが事例として扱われている。CPの普及に関しては、日本もその例外ではなく、キャリア教育の一環として、初等から高等教育までCPを用いた実践は数多く見られる。そのため、ここで紹介する知見は、欧米に限らず、日本におけるCPプログラムについて考える際にも、少なからぬヒントを与えてくれると考える。なお、労働市場とCPの関係に関しては、CPガイドブックの分析をおこなったCollin (2011+)がある。

他方、本論文は、CPプログラムにより築かれ評価される身体性に関する研究でもある。「身体」という古くて新しい概念を社会学にもたらした、身体社会学 (corporeal sociology) は、現在発展めざましい分

野の1つであり、例えば、Bourdieuのプラクシス理論を批判的に継承するCrossley (2001)や、「身体的資本」概念を提唱したShilling (2004)がその一例である。本論文は、この系譜の延長線上に位置していると言える。

本論文では、米国中西部にある高等学校2校（地方にありblue-collar家庭出身の生徒が多いFairmont校と、郊外にありおもにupper-middle class出身生徒が通うGlenview校）を対象としたエスノグラフィックな調査をもとに、両校のCPプログラムがいかに構造化されており、その中で生徒たちはどのような身体性を提示するのか、そしてそれはいかなる帰結を生むのかについて、その一端を明らかにしている。以下でその概要を見ていこう。

まず、CPプログラムの実施内容について、両校で共通しているのは、生徒たちそれぞれに学課や課外での諸活動で育んできたスキルや資質、すなわち自らの個性を示すようなアイテムを集めさせ、履歴書やキャリア計画書などとともに、それらのアイテムを過去から現在、そして未来への個人の軌跡 (personal trajectory) としてCPにまとめさせ、最終的には卒業面接 (exit interview) の場において、その成果を学区からの代表者や実業家で構成された面接官たちの前で発表させるという過程である。つまり、本論文の原題に象徴されるように、CPプログラムは生徒たちにとって、大学入試での面接や就職面接に向けての“予行演習 (dress rehearsal)”としての働きを持っているのだ。

つぎに、CP構成の仕方や卒業面接に関して、どのような指導がなされるのか。CPは学課や課外活動での経験を示すアイテムによって構成されると上述したが、どんな経験でも評価されるのではない。例えば、学外における芸術団体（合唱団、劇団など）や公的機関（スポーツチームやサマーキャンプなど）での経験には高い価値が与えられるが、農作業やサービス産業

での賃労働といった経験は低く評価される傾向がある。すなわち、middle classの生徒たちがより多く持つであろう、公的空間での経験はそのまま語ることを推奨されるが、低く評価されるような体験は一度公的なコードに翻訳して語り直すよう指導されている。また、卒業面接での“正しい”服装や振る舞いに関して、プログラムのアドバイザーたちは、就職面接に臨むに相応しいビジネス・カジュアルな服装で、姿勢を正して座り、いつも笑顔で、自らの興味や熱意を示すよう、生徒たちに助言している。

それでは、CPプログラムの集大成である卒業面接で、生徒たちはどのように自己呈示し、誰が“よい生徒”として評価されるのか。Collinは、両校生徒のうち6名（upper-middle classの白人男女4名、working class/lower-middle classの白人男女2名）に注目し、面接の場における生徒たちの「身体的資本」（着こなし方、身体の保持の仕方など）を詳細に記述している。その内容をここで詳述することはできないが、生徒たちの身体的資本の展開の仕方には明らかな違いが見られる。すなわち、upper-middle classの生徒たちは、面接官である大人たちとの会話をスムーズにおこない、概ね面接の状況に上手く自らのハビトゥス（あるいは身体）を調和させており、面接官たちに彼ら彼女らの努力を賞賛されていたのに対して、working class/lower-middle classの生徒たちは、公的な空間での大人たちとの会話に慣れておらず、例えば硬直した姿勢やアイコンタクトの少なさなど、面接の場に“相応しくない”身体的資本を展開したため、自らのキャリアの軌跡について不確かな印象を面接官たちに与えたのである。また、同じupper-middle classであっても、男女間で身体的資本の展開の仕方には差がある。男子生徒たちは、独特な服装をし、その場における規則を巧みに曲げながら、自らの創造性を示した一方で、女子生徒たちは、より厳格な基準のもと、控えめな着こなしで、面接を乗り切っていたのである。

しかし、CPプログラムの一連の過程は、一部の生徒にとってのみ、豊かな経験を提供し、有利な結果を

もたらすわけではない。なぜなら、Collinが述べるように、本論文に登場した6人の生徒は、最終的には、全員卒業面接に合格し、多かれ少なかれCPプログラムでの経験を楽しんでいたのである。さらに、それは、今後生徒たちが不安定な社会を歩んでいく上で活用可能な経験を提供しているとも考えられる。

このように見れば、CPプログラムは生徒たちにとって有益な実践であると結論付けたくになるが、CollinはCPを決して楽観視していない。彼は、upper-middle classに典型的な信念や経験、およびそれをもとに形成される身体性に特権を与えるよう構造化されたCPプログラムは、不平等な社会的関係性を孕んだ秩序の再生産のための条件作りに加担しているのではないかと問題提起している。

こうした結論については意見が分かれるかもしれないが、本論文は今後日本でのCPプログラムを評価していく上で大変重要な論点を提供しており、また「身体性」への着眼は入学試験での面接や就職面接の検討にも十分応用可能であるだろう。日本においては、どのような身体が“よい学生”あるいは“よい労働者”として評価されるのか、またそれは社会的不平等の再生産に与するのか。それらの問いとその解明に向けてのヒントをわれわれに提供してくれるのが、この論文なのである。

参考文献

- Collin, Ross (2011†) “Selling the Self: Career Portfolios and the New Common-Sense of Immaterial Capitalism.” *Social Semiotics*, 21 (5), pp.615-632.
- Crossley, Nick (2001) *The Social Body: Habit, Identity and Desire*. London: Sage Publications. (=2012, 西原和久・堀田裕子訳『社会的身体——ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社)
- Shilling, Chris (2004) “Physical Capital and Situated Action: A New Direction for Corporeal Sociology.” *British Journal of Sociology of Education*, 25 (4), 473-487.

きし・あきのり 東京大学大学院教育学研究科博士課程。
最近の主な論文に「美術系大学を経由したアイデンティティ
変容——美大生へのインタビューを通して」（修士論文）。教育
社会学専攻。